

## 〈紹介文〉

### 小山先生・松村先生・秦先生への惜別

鈴木 健 司

同志社女子大学英語英文学科にとって2023年春は大きな変化の時となった。それぞれに大きな足跡を残した3名の先生方が、定年で大学を去られた。

小山薫先生は、1986年、田辺キャンパス開設及び同志社女子大学短期大学部設立と同時に英米語科専任講師として入社され、短期大学部廃止後は学芸学部（2009年度から表象文化学部）英語英文学科で勤められた。学生部長、英語英文学科主任なども務められた。本学英文学科卒業後、大学院で越智文雄先生のもとミルトン研究の道に進まれ、その後は本学に事務局を置いていたミルトンセンターの実務をも永らく支えられた。

「小山先生の授業は寝られへん」と、幾人もの学生から聞いたことがある。いい加減なことをことのほか嫌い、授業に臨む基本姿勢を大事にされた先生が居眠りに厳しく処されたことや、よく通る声が眠気を寄せ付けなかったことなど、理由はいろいろあろうが、何より生氣あふれる面白い授業であったからだろう。いつからか先生は関心の中心をミルトンから伝承文学やファンタジーに移されたが、その授業は毎年学生の絶大な人気を博していた。

松村延昭先生は、1987年に短期大学部英米語科専任講師として入社され、短期大学部廃止後は学芸学部（2009年度から表象文化学部）英語英文学科で勤められた。教務主任、英語英文学科主任なども務められた。フィッツジェラルドなど専門の20世紀のアメリカ小説をはじめ、映像文化や人種問題といった多様な切り口からアメリカ文学・文化を幅広く講じられた。

在外研究中にシュテフィ・グラフ（世界的な女子テニスプレイヤー）とエレベーターで乗り合わせて“Are you Graf?”と訊いたという逸話は、その素朴な問かけが松村先生らしいと、テニス仲間の語り草だった。長年の

ご最頂だったプロ野球の近鉄バファローズが球団合併により消滅し、しばらく失意の期間があったようだが、その後は覚悟を決めてオリックスバファローズを応援されていた。長年にわたり低迷していたチームがここ2年連続優勝を達成したのは、先生のご退職へのこれ以上ない饒になったと思う。

秦由美子先生は、2021年に表象文化学部英語英文学科教授として入社され、大学院文学研究科英語英文学専攻主任を兼任された。ご専門であるイギリスの高等教育に関する多数の実地調査の経験から、現地の大学事情や社会事情にも精通され、本学科のイギリス文化の分野にこれまでとは違う形で厚みを加えられた。また、幅広い人脈を生かして学外から多彩な講師を招聘され、キャリア関係科目でのご貢献もきわだっていた。

先生が学生に向けて語る時、いつも芯のおおった情熱にあふれ、彼女たちへの愛情がほとばしっていた。とりわけ、海外で学ぶことのすばらしさや世界に目を向けることの大切さを説かれて、どれほど多くの学生が勇気づけられ、未来に向けて新たな夢を抱いたことだろうか。在職された期間こそ長くはなかったが、先生の言葉の端々には常に同志社女子大学への深い愛着が表れていて、そのことが何にもまして心強く感じられた。

3名の先生方の訾咳に接する日々は過ぎたが、私たちには多くの貴重なものが残された。小山先生、松村先生、秦先生、ありがとうございました。